

初学者大歓迎!

東京池袋
『資本論』を読む会
第1巻学習会

剰余価値率とは何か？それは何を意味するか？

生産物の価値形成のメカニズムを深く理解しないと、資本と労働との本当の関係を知らずには出来ないのじゃよ



9月7日(土)午後6時から9時まで
西池袋第二区民集会室 豊島区西池袋3-8-20 JR池袋駅西口から徒歩12分

【範囲】 第3篇「絶対的剰余価値の生産」
第7章「剰余価値率」a「労働力の搾取度」

第6章「不変資本と可変資本」に3回も要しましたが、生産物の価値形成のメカニズムが深く掘り下げられました。生産手段と労働力という生産諸要素は労働過程で結合されて生産物が生み出されます。これらは価値増殖過程において資本として現われそれぞれ異なった役割を果たします。マルクスは、客体的要因である生産手段は生産過程で価値を変えないがゆえに不変資本と呼び、他方、主体的要因である労働力は生産過程で価値量を変えるがゆえに可変資本と呼びました。

さて本章の標題は「剰余価値率」です。剰余価値率とは剰余価値の何かに対する割合に違いないのですが、その“何”が問題になってきます。それによって剰余価値の様相が異なってくるからです。剰余価値は新たに創造された価値から労働力の価値に相当する額を引き去って残った部分なので、これは労働者が生み出した価値の一部を資本が奪っていることを意味します。これは「搾取」に他なりません。では搾取度(搾取の割合)はどのように表わされなければならないのでしょうか？ 剰余価値は前貸しされた総資本の価値(これは不変資本と可変資本の両方を含む)を超える資本の超過分として表わすことができます。この観点からは、剰余価値率とは剰余価値の前貸しされた総資本額に対する割合ということになりますが、これは労働力の搾取度を表わしているのでしょうか？ 搾取度を正確に表わしてこそ剰余価値率の名に値します。それは如何に表わされなければならないのでしょうか？

本章は、第1節「労働力の搾取度」、第2節「生産物の比例配分的諸部分での生産物価値の表示」、第3節「シーニアの『最後の一時間』」、第4節「剰余生産物」の4つの節から成ります。

次回は、本章の主要部分の第1節をやりたいと思います。本節には、価値生産物、必要労働(時間)と剰余労働(時間)、等々。マルクスは当時の資料から搾取度を推定していますが、現代日本の搾取度は果たしてどれくらいなのでしょう？

『資本論』は決してやさしくはありません。だから一緒に学ぶ意義があります。ともに学びましょう！

<裏面は前回学習会の報告です。参考にぜひお読みください>

【学習会報告(8月10日実施)】

8月10日(土)に学習会を行い、第6章「不変資本と可変資本」の残りの部分を学習しました。

第6章 不変資本と可変資本(3回目)

1 生産手段の価値はいかにして生産物の価値を形成するか(続き)

(1) 価値の移転・保存が「現実の労働の背後で行なわれる」とは?

本章のテーマは、労働過程の諸要因が、生産物の価値の形成にいかに参加するかを究明することです。

生産手段そのものが価値を持っている場合、その価値は労働過程の客体的要因として生産物に移転し生産物価値の一部を形成するのですが、そこに働いているメカニズムがこれまで考察されてきました。今回はその続きになります(第17段落から)。

「生産的労働が生産手段を新たな生産物の形成要素に変えることによって、生産手段の価値には一つの転生が起きる。それは、消費された肉体から、新しく形づくられた肉体に移る。しかし、この転生は、いわば、現実の労働の背後で行なわれる。労働者は、元の価値を保存することなしには、新たな労働をつけ加えることは、すなわち新たな価値を創造することはできない。なぜならば、彼は労働を必ず特定の有用な形態でつけ加えなければならないからであり、そして労働を有用な形態でつけ加えることは、いろいろな生産物を一つの新たな生産物の生産手段とすることによってそれらの価値をその新たな生産物に移すことなしには、できないからである。だから、価値をつけ加えながら価値を保存するということは、活動している労働力の、生きている労働の、一つの天資なのである。そして、この天資は、労働者にとってはなんの費用もかからず、しかも資本家には現にある資本価値の保存という多大の利益をもたらすのである。景気のよいあいだは、資本家は利殖に没頭しきっていて、労働のこの無償の贈り物が目に見えない。労働過程のむりやりの中断、すなわち恐慌は、彼にこれを痛切に感じさせる」(原書 221 頁)

労働は生産手段を生産物の形成要素とするのですが、生産物が形成されるのと同時に生産手段の価値に「一つの転生」が生じるというのです。「消費された肉体」とは生産手段であり、「新しく形づくられた肉体」とは生産物ですが、一つの転生とは生産手段の価値が生産物に移転することに他なりません。問題は、「この転生が…現実の労働の背後で行なわれる」とマルクスが述べている意味です(仏語版は「この転生は、現実の労働が知らぬ間に行なわれる」です)。

この意味を考えるうえでヒントとなる文章が一つ先

のパラグラフにあるように思われます。

「それ(生産手段の価値——引用者)は保存されるが、しかし、労働過程で価値そのものに操作が加えられるので保存されるのではなく、価値が最初そのうちに存在していた使用価値が消失はするがしかしただ別の使用価値となつてのみ消失するので保存されるのである」(原書 222 頁)

生産手段の価値の生産物への保存・移転といっても、それが行なわれるのは生産手段の価値そのものに操作が加えられるからではなく、生産手段の使用価値に手が加えられて新たな生産物が生み出されるからだということです。生産手段に対し働きかけるのは具体的有用労働であって、その背後で生産手段の価値に一つの転生が生じるということではないでしょうか。



(2) 労働の「無償の贈物」とは?

このパラグラフに、労働の「天資 Naturgabe(自然の贈物)」という言葉が出て来ます(労働の「無償の贈物 Gratisgabe」という言葉も出て来ますが、天資と同じ意味でしょう)。

労働が無償で行なう贈物とは何でしょうか?

それは文脈から生産手段の価値の保存という点にあることは確かですが、それはどうやら二通りの意味で言われているようなのです。一つは消費された生産手段の価値を生産物に移転・保存するということであり、もう一つは「現にある資本価値の保存」ということではないか、と。

前者についてはこれまで散々考察されてきたことですが、後者については説明が必要です。機械や工場建物などの労働手段は、もし恐慌のような「労働過程の無理やりの中断」によって運転が休止してしまうと、そのあいだ自然の腐朽に晒され傷んでしまいます。そのようなことにでもなれば、労働手段の「現にある資本価値」(残存価値)も失われてしまいます。生きた労働は、労働手段の使用価値を維持することによってその残存価値を保存するという役割も果たしていることになります。

第2部第8章「固定資本と流動資本」でも「生きている労働の無償の天資」について触れている箇所があり、同趣旨のことが述べられているとの指摘がありました。念のため、その一部を引用します。

「労働の維持力は二重の性質のものである。一方では、労働は、労働材料の価値を生産物に移すことによって、この価値を維持し、他方では、生産過程での労働手段の働きを通じてその使用価値を維持することによって、労働手段の価値を、自分がこれをも生産物に移すの

でない限り、維持するのである」(第2部原書173頁)

ではこの労働の働きがなぜ無償なのでしょう？

人間労働力の支出は「人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出」(第1章「商品」、原書59頁)です。これは抽象的人間労働の側面です。その労働の支出の結果、価値として結実するのですが、労働の支出によって労働力は消耗するのであり、それはその価値によって(その一部とはいえ)償われなければなりません。これに対し価値の移転・保存は、労働のもう一つの側面である具体的有用労働の背後で行なわれるため普段は意識されることはありません。しかもこれには費用がかからないので、資本家は労働者に対し何の償いもしません。

(3) 生産手段の価値は再現するのであって再生産されるのではない

「およそ生産手段として消費されるものは、その使用価値であって、これの消費によって労働は生産物を形成するのである。生産手段の価値は実際は消費されるのではなく、したがってまた再生産されることもできないのである。それは保存されるが、しかし、労働過程で価値そのものに操作が加えられるので保存されるのではなく、価値が最初そのうちに存在していた使用価値が消失はするがしかしただ別の使用価値となつてのみ消失するので保存されるのである。それゆえ、生産手段の価値は、生産物の価値のうちに再現はするが、しかし、正確に言えば、再生産されるのではない。生産されるものは、元の交換価値がそのうちに再現する新たな使用価値である」(原書222頁)

そもそも価値とは社会的実体であって消費されるものではありません。消費されるのは使用価値です。これを生産手段に当てはめるとどうなるのでしょうか？

これまで何度も確認してきたように、生産手段は使用価値として生産過程で消費されますが、その価値は生産物に保存されます。その価値はもともとあった価値なので、それは再生産されるのではなく、新たな使用価値(生産物)のうちに再現するとマルクスは言うのです。

2 労働過程の主体的要因である労働力は生産物価値の形成のどんな役割を果たすか？

客体的要因としての生産手段を見てきましたが、今度は主体的要因である活動しつつある労働力すなわち労働そのものが考察されます。

「労働がその合目的な形態によって生産手段の価値を生産物に移して保存するあいだに、その運動の各瞬間は追加価値を、新価値を、形成する」(原書223頁)

まず「労働者が自分の労働力の価値の等価を生産した点、たとえば6時間の労働によって3シリングの価値をつけ加えた点で、生産過程が中断」(同前)した場合

が考察されます。

この3シリングは「生産物価値のうちの、生産手段の価値からきた成分を越える超過分」であり、「この過程のなかで発生した唯一の本源的な価値であり、生産物価値のうちでこの過程そのものによって生産された唯一の部分」(同前)です。「それは、ただ、資本家によって労働力の買入れのときに前貸しされ労働者自身によって生活手段に支出された貨幣を補填するだけ」なので「支出された3シリングとの関係からみれば、3シリングという新価値はただ再生産として現われ」ます。「しかし、それは現実には再生産されているのであって、生産手段の価値のようにただ外観上再生産されているだけではない。ある価値の他の価値による補填は、ここでは新たな価値創造によって媒介されている」(同前)のです。

「しかし、われわれがすでに知っているように、労働過程は、労働力の価値の単なる等価が再生産されて労働対象につけ加えられる点を越えて、なお続行される。この点までは6時間で十分でも、それではすまないで、過程はたとえば12時間続く」(同前) ことになります。

12労働時間の場合、「労働力の活動によってはただそれ自身の価値が再生産されるだけではなく、ある超過価値が生産される」ことになります。それは剰余価値であり、「生産物価値のうちの、消費された生産物形成者すなわち生産手段と労働力との価値を越える超過分」(同前)に相当します。



3 不変資本と可変資本

マルクスはこれまでの考察を振り返っています。

「われわれは、生産物価値の形成において労働過程のいろいろな要因が演ずるいろいろに違った役割を示すことによって、事実上、資本自身の価値増殖過程で資本のいろいろな成分が果たす機能の特徴づけたのである。生産物の総価値のうちの、この生産物を形成する諸要素の価値総額を越える超過分は、最初に前貸しされた資本価値を越える価値増殖された資本の超過分である。一方の生産手段、他方の労働力は、ただ、最初の資本価値がその貨幣形態を脱ぎ捨てて労働過程の諸要因に転化したときにとった別々の存在形態でしかないのである」(原書223頁)

一方の「生産手段すなわち原料や補助材料や労働手段に転換される資本部分」(同前)ですが、それは、生産過程でその価値量を変えません。そのため不変資本部分または不変資本と呼ばれます。

他方の「労働力に転換された(る)資本部分」ですが、これは「生産過程でその価値を変える。それはそれ自身の等価と、これを越える超過分、すなわち剰余価値とを

再生産（剰余価値については「再生産」ではなく「生産」という言葉が充てられるのが適切だと思われます——引用者）」原書 224 頁）します。「資本のこの部分は、一つの不変量から絶えず一つの可変量に転化して行く」（同前）ので、これは可変資本部分または可変資本と呼ばれます。

「労働過程の立場からは客体的な要因と主体的な要因として、生産手段と労働力として、区別されるその同じ資本成分が、価値増殖過程の立場からは不変資本と可変資本として区別されるのである」（原書 224 頁）

「私はこれを〇〇資本と呼ぶ」と書いているように、不変資本と可変資本という資本概念はマルクスによるもので、資本区分としては最も本質的なものです。

当時の経済学において流布していたのは固定資本・流動資本という区分でしたが、それは資本家の手もとに固定されて留まるか否かといった基準で区分するものであり、皮相なものでした。

なお、マルクスが不変資本・可変資本という概念を確立したのは比較的はやく、マルクスが『経済学批判』の仕事に着手してから間もない段階の『経済学批判要綱』（1857-58 年草稿）にこの概念が出てくる、との発言がありました。

4 生産手段の価値革命（価値変動）は不変資本の概念そのものには影響しない。また労働過程の技術的な諸条件の改造は不変資本と可変資本の区分にも影響しない

価値革命すなわち労働の生産力の増減によって生産手段そのものに価値変動が生じた場合に、その生産手段を使って生産した商品の価値がどうなるかが考察されます。

綿花などの原料が不作のため高くなった場合、値上がり前に買ったときより高い価値を生産物（糸）につけ加えます。この価値変動が紡績過程の外で、つまり綿花の生産過程で起きると、在庫として存在する綿花の価値も変動し、これを原料とした糸の価値に反映するというのです。

「一商品の価値は、その商品に含まれている労働の量によって規定されてはいるが、しかしこの量そのものは社会的に規定されている。もしその商品の生産に社会的に必要な労働時間が変化したならば——たとえば同じ量の綿花でも不作のときには豊作のときよりも大きい量の労働を表わす——、前からある商品への反作用が生ずるのであって、この商品はいつでもただその商品種類の個別적인見本としか認められず、その価値は、つねに、社会的に必要な、したがってまたつねに現在の社会的諸条件のもとで必要な労働によって、計られる」（原書 224-225 頁）のです。

このことは労働手段にも当てはまります。新たな発明により同じ種類の機械が安価になった場合、それは

現に生産過程で機能している古い機械にも反作用して減価し、本来持っていたものよりも少ない価値を生産物に移すことにならざるをえません。とはいえ「生産手段の価値の変動は、たとえその生産手段がすでに過程にはいつてから反作用的に生じても、不変資本としてのその性格を変えるものではない」（原書 225 頁）とマルクスは言います。

「不変資本と可変資本との割合の変動も、それらの機能上の相違に影響するものではない」（同前）ありません。もし「労働過程の技術的な諸条件が改造されて、たとえば、以前は 10 人の労働者がわずかな価値の 10 個の道具で比較的小量の原料に加工していたのに、今では 1 人の労働者が 1 台の高価な機械で 100 倍の原料に加工するようになるでしょう。この場合には、不変資本、すなわち充用される生産手段の価値量は非常に増大し、労働力に前貸しされる可変資本部分は非常に減少するであろう。しかし、この変動は、不変資本と可変資本との量的関係、すなわち総資本が不変成分と可変成分に分かれる割合を変えるだけで、不変と可変との相違には影響しないのである」（同前）

この箇所「明らかに、この価値変動は、紡績過程そのものの綿花の価値増殖にはかかわりがない。もし古い綿花がまだ全然労働過程にはいつていないならば、それを今では 6 ペンスではなく 1 シリングでもう一度売ることができるであろう。それどころか、それが労働過程を通過していることが少なければ少ないほど、いっそうこの結果は確実なのである。それだから、このような価値革命にさいしては、最も少なく加工された形態にある原料に賭けるのが、つまり、織物よりはむしろ糸に、糸よりはむしろ綿花そのものに賭けるのが、投機の法則なのである」（原書 224 頁）とあります。「最も少なく加工された形態にある原料に賭けるのが……投機の法則」（同前）だという理屈がいまひとつ分からないとの声が出ました。

綿花の価値上昇は綿花の生産過程で生じています。原料となる綿花の価値変動は糸の価値への影響は直接的ですが、織物の価値への影響は間接的です。両者の関係が直接的なら価値の上乗せがより確実であり、間接的であれば価値の上乗せが不確実だということでしょうか？ そういうことであれば「最も少なく加工された形態にある原料に賭けるのが……投機の法則」だということになります。

（次回から第 7 章に入ります）

（雅）

